

2012年度教養文化研究所第1回公開講演会報告

教養文化研究所長 林 好雄

実施日時：7月11日（水） 13：30～15：30

講師：孝寿 聡（こうじゅ さとし）氏

題目：映画について、禅について

場所：本学 AVホール

林 教養文化研究所の所長の林です。今日は暑い中、よくお集まりいただきました。どうもありがとうございます。今日は、2012年度の第1回の教養文化研究所主催の公開講演会で、孝寿聡さんに、孝寿さんは、長い間、日本各地の民俗とか、芸能とか、さまざまな風習とか、そういう記録映画を撮っておられたかたなんです、「華開世界起」、読み下すと「華開いて世界起こる」という題名の映画を、去年、ピエール・ブシューという人と一緒に制作されて、パリで公開されたんです。非常に好評で、日本ではまだ一部試写会のようなことがあっただけで未公開の映画です。映画と言っても、何か筋があってドラマがあるというのではなくて、『正法眼蔵』の世界が淡々と描かれているというような映画なんです、その映画を見て、制作者の孝寿さんにお話をさせていただこうと、その『正法眼蔵』と映画にまつわるお話をさせていただきたいと、こういう趣旨です。『正法眼蔵』と道元という、非常に特殊なというか、限られた世界なので、何人来ていただけるのか心配していたんですが、こんなにもたくさん来ていただいて感謝しています。

というのも、この映画には、若干この大学にも関わる事情がありまして、それは、わたしにとっては非常に喜ばしいことなんです、この映画に出演をされる主要な5人の登場人物のうちの1人が、森本和夫先生といいまして、道元の『正法眼蔵読解』を筑摩書房から全10巻出されている先生なんです、その先生が、この大学が開学して2年目から15年間この大学で教えておられたんです。わたしはたまたまその数少ない弟子の1人で、そのご縁でこの大学で今も教鞭を執っているんですが、その森本和夫先生がこの映画に出る、しかも、大学を辞められてからも十数年たつんですが、最近のお姿を見られるということで、わたしとしても非常に楽しみな機会なんです。こういう機会を与えられて、非常に喜んでます。

孝寿さんは、この大学を森本先生が辞められた後でも、個人的に森本先生とおつきあいがあって、坐禅会など一緒にされていまして、そのご縁で映画を撮られるということ

になりました。映画監督ですから、その映画作品を見れば、それですべては終わりということだと思うんですが、いろいろと面白いお話もあるかと思しますので、まず孝寿さんに30分から40分ぐらいお話しいただいて、それから休憩を10分ぐらい取りまして、大体1時20分か1時半ぐらいから、1時間半の映画なんですが、映画を見たいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。では孝寿先生、よろしくお願ひします。

映画について、禅について

孝寿 聡

孝寿 こんにちは。孝寿聡と申します。映画監督というよりは、映像作家といったほうがいいと思うんですが、わたしの専門は、ご紹介のあったように、日本の民俗芸能とか伝統技術を、皆さんがよく見られているテレビのドキュメントとは違う学術的な記録といますか、一般の映像とは異なる非常に特殊な分野の仕事を、国立博物館をはじめ各地の博物館等から発注依頼を受けて作ってきました。

今日上映する「華開世界起」や、前作「ビルマ戦線の記録、水筒と飯盒」などは、わたしの事務所、博物館映像学研究所を閉めたあと、わたし自身の力で作った、自主制作といますか、そういうことで作った、一番最新作です。去年、フランスで公開しまして、何百人かのかたに見ていただいています。

最初に申し上げた映像作家って言ったほうが適切なのはなぜかと言いますと、皆さん、まずお聞きになったことないと思うんですけど、映像人類学、これはビジュアル・アンソロポロジーとか、あるいは映像民俗学、ビジュアル・フォークロアというんですが、わたしはこういう分野の数少ない専門家です。世界中でも数百人しかいないと思います。そういう映像の作り手ですので、映画監督より映像作家と呼んだ方がよいと思います。

聞き慣れない分野なので簡単にご紹介しますと、映像人類学というのは、一つは人類学的に見て貴重なもの、つまり珍しいものとか、このままではなくなってしまうというようなもの、事象ですね、そういうものを映像で記録する。ここまでは常識的です。

その次に大事なことは、今まで撮られた、ここ100年ぐらいの間に撮られた記録映像と称されるものが本物かどうか確かめる、わたしは映像資料批判と名付けました、専門的には。われわれの時代、皆さんだいぶお年のようですから、わたしと同じぐらいだと思うんですけど、そのイメージですね、われわれの時代のイメージ。それを構成してるのは、意外に多くの記録映像なんです。記録映像と呼ばれるものは劇映画とちがって本物だという思い込みがありますからね。で、これは本物かどうかということは、これをきちんと見ないと分からないんです。20世紀というのは戦争と革命の世紀とかいうことで、なかなかにぎやかで狂った時代だったんですけども、そして、それに対してわれわれは広く一定のイメージを持っています。第一次大戦、第二次大戦、ヨーロッパ、アジア、われわれ日本もですね。それは一体全体本当なんだろうかということが、二番めの、わたしがいうこの映像資料批判なんです。

結論から申し上げますと、ほとんど嘘です。虚構といってよいでしょう。つまり、戦闘の映像や写真として伝えられているものは、大体、演習の映像写真だと思ってください。実戦の映像写真というのはほとんど存在していません。全く存在しないことはないですが、これは、最近のビデオなどによって、簡単にわれわれは映像を手にする事ができるんですけれども、20世紀最初の時代の映像というのは、カラカラ手で回したり、何人かで動かさなきゃいけないし。「風と共に去りぬ」とか、そういう大規模な映画で使う、制作や演出も大変なことはもちろんですけど、カメラも1人でなんかとても回せません。5人とか10人とかで、カメラを動かし撮影するだけでもです。それにフィルムの解像力が大変低い時代ですから、何十キロというライトをたかないと映りません。

劇映画にしてもそうなんですけれども、ドキュメンタリーと称されている、記録映像と称されている世界も大変なわけです。

例えば、日中事変が始まるときの映像なんかも、実際は戦闘後もう1回やって撮ります。(カメラを構える身ぶりをする)で、こうやってカメラを敵に向ければ、すぐ狙撃の目標になります。だから、塹壕から出て行って、こう、カメラを構え、パッと身を隠す。こういうことはなんとか可能なわけですね、スチールの場合は。しかし、15秒の間回そうとすると、こう立って回さなきゃいけないのです。あるいは撮影するため、その場所にカメラを置いてると、15秒ってすごい長いですから、それでは敵に撃たれてしまいますから、だから、そういう実際の戦場の映像のようなものは大体演習で撮ってると思って間違いないのです。そういう映像記録と称されるものが、われわれにイメージを与えて、われわれのイメージになってしまってる。

例えば戦闘の例ではなくても、われわれは厚木の飛行場にマッカーサー元帥が降りてくる映像、映画フィルムを何度も見させられています。それから、「アイ・シャル・リターン」で有名ですが、フィリピンに戻ってくる海の中を、マッカーサーがジャブジャブ歩いてくるっていう映像がありますね。あれは、全部やらせです。それはなぜ分かるかっていうと、アメリカは、公開しなきゃいけないんですね、ある期間が来ると。で、映像でそういう公開されたものを手に入れてみますと、厚木の飛行場に着いたマッカーサーを、いろんなアングルで、何回も撮ってる。で、その中で一番うまく撮れたなあっていうのがわれわれの知ってるあの歴史的な映像なんです。だから、マッカーサーはあの飛行機から何度も降りてくるんですね。カメラマンは、いろいろなアングルで何回も寄って撮ったり、引いて撮ったりしてるわけです。

それから、日本の降伏の調印式、あれも何度も撮ってるんですね。で、その中で一番適切なものを選んでます。だから、重光葵は何度も、ここに立て、ここに立てってき

と言われてるんでしょう。で、そういうように、その映像がそのまま本物であるかどうか調べて確かめるのが映像資料批判です。

その次は、映像人類学の三番めのテーマです。皆さんは、やっぱりテレビがはじめて映った日を覚えてらっしゃると思います。今の若い人たち、お子さんたちはテレビっていうのは最初からあるんですね。赤ん坊のときからもうチラチラしてあるわけです。それぐらい急速に映像化社会っていうのが進展してしまってるわけです。こんなに全部全てが全て映像になってしまった社会は、一体どういうふうな原理でできているかっていうことを研究するのがこの三番めになります。

そろそろちらほらそういうふうなことを考えたり、あるいは分析したりしている研究はありますけれども、世界的に見ても、これはまだまだなんですね。で、そういう、これは非常に大きな仕事なんですけども、なぜそういう大事な問題を考えてこなかったかっていうと、映像というのは、コンテンポラリー、同時代のもの、学問の対象にはならないと思ってたんですね。そういうのが一段落着いて、結果としてこんなものすごい映像化社会ができちゃったと受けとめる。それはどういう原理で、どういうふうなものなのかっていうのを考えるのが、第三番めの研究テーマなんです、映像人類学の。

そして四番め、それ全体をもっと深めていくための研究、これは映像言語とは何かっていう研究なんです。これもほとんど手はついていませんけれども、そろそろ手がつけられ始めている。僕は映像言語の専門家です。まあ、手品師というか、魔術師なわけです。つまり、僕は、映像言語で書くことができる、つまり、モンタージュができて、カメラのアングルの位置を決めて、あるイメージなり、考えなりを伝達することができるんです。と同時に、他の映画監督が作った映像作品も読めます。皆さんは、おそらく映像言語の片方の分野だけ。つまり、読めるっていうのは、意識化されないけど、ものすごい教育強制を受けてるわけですね。僕と皆さんはだます方とだまされる方に分かれているわけです。

一番最初にできた映画は、「列車の到着」って有名な映画があるんですけども、このときは、初めて見た人はみんな逃げちゃった。実際に列車が到着すると思って。それが、そうではないということだんだんあるいはすぐに気がつくわけです。それから、クローズアップなんて、われわれは慣れてますよね。普通の人間の顔が何十倍もの大きさになってスクリーンに出るわけにもかかわらず。それも、最初の時点では、人々はそれをなかなか受け入れることができなかつたんです。

ちょっと専門的になりますが、なかなか面白い分野、あまりお聞きにならない分野だろうと思うんですが、映像言語の問題の最近の動きについて、簡単に聞き流していただ

きましょう。映像言語の特徴というのは始めが分かっている。20世紀の初めに、フランスのリュミエール兄弟が、映画というものを発明するわけです。映写機と撮影機を発明するんです。これは説明すると長くなるんですけども、二つの同じ原理の機械を並べてあるだけなんです。最初は、撮影機が映写機にもなれたということです。映像言語の最大の天才は誰かという、現にここに至るまで、この100年の間の最大の天才は誰かという、これはリュミエール兄弟です。映画文化っていうのはフランスで発祥してるんですけど、ただ、すぐにアメリカのハリウッドとか、ソ連のモスフィルムとかに取られちゃうんですけど、やっぱりフランスが非常に大きな役割を果たしているし、今に至るまで、やっぱり映画の中では実は一番原理的っていうか、根本的なところでは、主流っていうか、大きな本流だと思ってください。

今でも、映像化社会とか映像言語という問題も、やはりフランスに優れた理論家や実行する人たちがいます。ちょっと専門的になるんですけども、最初にそういうことを、今言ったようなことを確実に認識して作品を作った人の一人は、ルロワ・グーランという、もうだいぶ前に亡くなりましたが、『身ぶりと言葉』という素晴らしい本を書いているんですけども、このルロワ・グーランが1946, 47年にアフリカで回したのが、検討するに値するっていうか、本格的に学問としても比類のない映像記録だったと思います。

その次に、皆さん、ヌーベル・バーグってご存じでしょ。フランスで起こった新しい映画運動、新しい波っていう意味ですけども、このときに、ジャン・リュック・ゴダールはじめ、素晴らしい映画作家たちが出てくるんですけども、その中で、人類学的な意味合いでの映像で大きな仕事をして、世界を引っ張ったのがジャン・ルーシュという人です。シネマヴェリテ、ジャン・ルーシュ。僕と立場はだいぶ違うけども、やっぱり素晴らしい作品をたくさん作っております。

そして、映像言語の研究ということでは、ドゥルーズという、えらい哲学者がいるんですけども、この人の、最近日本語にも翻訳されましたけども、『シネマⅠ・Ⅱ』という大著があります。

それから、これはまだ翻訳されていませんけども、ヴェルナール・スティグレルという、やっぱり哲学者といえますか、これは不思議な人で、銀行ギャングだった人です。5年ほど、禁固刑で、その間に哲学の勉強して、今やフランスを代表するような哲学者になってる人で、非常に不思議な履歴の人なんですけれども、この人もまだ翻訳されてませんが、『技術と時間』シリーズの第3巻、これが、映画の時代という内容です。で、このスティグレルは、何かギャングの経歴の割には、フィルムといえますか、映画だけではなくて、最新のCGとかです、コンピューターの中に組み込まれている映

像言語、こういうものの国立の研究所の所長とか重要な役を務めてる、大変不思議な、日本じゃちょっと考えられない人です。ただ、この人自身に作品があるかって、それはちょっと寡聞にして知らないんですけども。

最後に、フランスでそういう大きな仕事をしてる人に、ピエール・ルジャンドルという人がいます。これはドグマ人類学を唱えている大変独創的な思想家です。この人は哲学者というよりは人類学者ですけども、この人は3本ほど優れた実際の人類学映像を作っています。さわりはインターネットでも見られます。大御所の哲学者ジャック・デリダは広く思索を深めた人ですが、映像についてもヴェルナール・スティグレルとの対話を残しています。邦訳も出ていますが、たいへん難解ですが根底的に深く洞察に富んだものです。

こういうような流れで、今フランスを中心にしてお話しましたがけれども、最初に言いました三番めの映像化社会とは何かという問題と、それからもう一つ、四番めの最も大きな問題である映像言語とは何かという問題について、研究の大きな流れが出てきています。

これは本当に面白いことなんですけども、フランス語とか日本語とか英語とか、中国語でも、これは誰が工夫して、どうやってできたんだろうというときに、固有の人、この人はこういう工夫して、こういう言葉を改良したとか、こういう文字にしたとか、紫式部が『源氏物語』を書いたぐらいは分かりますけれども、その向こうに行っちゃうと、もう分かりませんね。例えば万葉仮名、平仮名を作ったのは一体誰だ、「いろは」は弘法大師とかいろんな説がありますが、そういうことって、もう霧の中ですよ。証明できない。

ところが、映像言語の特徴は、非常に面白いんで、たった100年しかたってません。映像言語の筆と紙を作ったのはリュミエール兄弟です。間違いない。それから、撮影機や映写機の機械も残っておりますし、その最初の作品も残っています。ただ、この時代は16コマですから、16コマで回せばスムーズに見えるけど、24コマで回転しますから、ごちなくガチガチして見えちゃいますけども、その他、クローズアップとか、映像の文法モニタージュで、こういうふうに組立てていくと面白いよとか、そういうのをやった天才が、例えばエイゼンシュテインですとか、特定できるんです。特定できると同時に、彼らは優れた理論家でもありましたから、書き残してもいるんです。どうしてこうやったかって。だから、映像言語の研究というのは膨大なんですけども、ほぼ同時代的にあたれるわけですから、ものすごく面白いです。

じゃあ、日本の映像言語はっていうと、皆さんは、普通、黒澤明はすごいって思っ

やうんですけど、あの人はハリウッドの物まねなんですね。ただ、うまいから、ハリウッド・スタイルだから、わかりやすいから世界の黒澤になっちゃったわけです。じゃあ、一体、本当に優れた日本的な映像は何か。小津、小津ってみんな言いますけども、でも、もっともって日本的な映像をピシッときめたのは、やっぱりマキノ雅弘とかね、ああいう人たちです。で、みんなそういうのは一段低くみて芸術作品だと思ってませんけど、実に天才的です。遠近とか、そういう欧米発の強制を変えちゃうわけですね。小津のマジックについては、いろんな分析が出てくるし解説もされてますけど、でも、それよりもっと前衛的で創意工夫をしたのは、やっぱり、これはマキノ雅弘という大天才です。

おそらくあと10年すれば、そのとおりだって分かるはずですよ。そういうような、日本の映像言語でも、日本独特の映像言語は誰がどうやって作ったかっていうことが分かっていますし、割合に書き残してもいるんです。だから、この分野の研究というのは、これからものすごい勢いで、発展していくはずですよ。

あまりに専門的になりますので、もしあとで質問されるかたがあれば、もっと内容を深くお答えしてもいいんですが。

今日上映する作品「華開世界起」の話になりますけども、わたしが制作、お金作ると、それから演出・構成を担当しました。ピエール・ブシュー君は、まだ若いんですけども、カメラマンを主に担当してます。この「華開世界起」を作るきっかけは、森本先生と、中央線の西荻のグレルという酒場でたまたまお会いして、本当に偶然なんですけど、森本先生が、フランス現代思想の研究家であると同時に、道元研究家でもあるということで、いろいろ教えを受けたことからです。

さて、この映画はどういう映画かっていうと、我慢して見ていただくと分かるんですが、150年ぐらい前に、欧米が、黒船で来るわけです。武力で来ちゃったから、大変なわけですよ。で、欧米式に、世の中を変えるにはどうすればいいかっていって、われわれの諸先輩といいますか、西郷隆盛とか、大久保利通とか、そういう人が努力する。西力東漸といいます。西の力が東にやってきた。

そうは言うんだけどでもですね、そんなに長く支配してません。中国はちょこちょこと土地を取られたけども、完全な植民地になったわけじゃないし、それから、日本が、これは非常に不幸なことだったけど、朝鮮半島を植民地にしたのも、36年ぐらいいか続いてません。一番ヨーロッパが東洋の富を収奪したのはイギリスです。大英帝国インド帝国というのも1870年に成立したが、1947年には独立してます。だから、70年ちょっとぐらいいか、完全に支配はしてないんです。だから、意外に、近々の歴史で、西洋の力が強いように錯覚してますけども、そう大したことじゃないんです。ご存じのように、

今ものすごい勢いで落っこちてきてますから、ドデン返しが始まってますね。

日本人は、皆さんも知ってるように、文明開化とか殖産興業とかやった。和魂洋才ということなんです。大和魂、和の魂と、洋の才、技術を結合してやっていこうじゃないか、こういうスローガンですね。中国の場合だと、これは清朝末期ですが、中体西用っていうんですね。中華を体として、タイは体育の体、中体西用、セイは西で、ヨウは用いるですね。これは、和魂洋才と同じスローガンです。お隣の韓国では、東道西器、東の道ですね、トウドウは。セイキは西、で、キは器ですね。東道西器ってスローガンを立てたんです。そうやって大きく変わるわけです。

で、この映画の大筋は、日本の仏教がフランスに伝わった、いま現在も伝わりつづけているという、そういう話なんです。つい最近、1970年ぐらいですけども、から始まった現象で、これは、僕は東力西漸だろうと思います。東の力が西に行く。何がすごいかって言うと、別に禅とか仏教を勉強したほうがいいよっていうのを、鉄砲突きつけて言ったわけじゃない。かってに向こうに行ったんですね。平和的に。

これは、非常に特徴的なことで、今の世界情勢考える場合でも大事な問題ですけども、キリスト教というのは世界に広まりましたけど、これは征服戦争なしに広まってません。それから、イスラム教も、征服戦争、まあ、これはジハードとか、そういう、一神教独特の、まあ強制ですね。キリスト教ほどではありませんけれども、イスラムの場合ってというのは、税金さえ納めりゃ、どんな宗教を信仰しても構わないんです。だから、差が出ています。キリスト教の場合は、もうユダヤ教以外は全部、死に値する罪ですから、だからそういう点で、非常に大きな征服戦争の結果、広がった世界宗教なんです。

今日お見せする、日本の仏教がフランスに伝わったというのは、別に鉄砲担いでフランスに広めたわけじゃない。仏教そのものも、インドから中国に伝わって、世界宗教になったわけです。インドでは一度滅びましたけれども。このときに、何か征服戦争で伝わったわけじゃないですね。お坊さんが中央アジアのああいいう難路険路を通過して、お経を持ってきたり、あるいはインドの偉いお坊さんが、わざわざ布教しにくる。東大寺の大仏の開眼供養のときも、ちゃんとインドのお坊さん来てやったっていうのは、皆さんのもしかしたらご記憶の隅にあるかもしれません。つまり仏教っていうのは、世界宗教の中で、これは今日の映画もそうなんですけど、別に武力とか戦争とか征服と関係なく広まっていったというのが、一番の特徴なんです。

じゃあ、今日の本旨、東と西とが出合う話なんですけども、東洋の仏教と、ヨーロッパが出合った。いろいろ出合ってるんですけど、一番最初はおそらくアレキサンダー大王が遠征して、インダス川まで来たときに、あの辺にいっぱいギリシャ人たちが国を建

てる。しっかりと記録に残ってるのは、『ミリンダ王の問い』というギリシャの王と、それからインドの仏教僧との対話がかなりしっかり残ってます。これも実際読んでみると、面白いものです。それ以降、マルコ・ポーロが来て、仏教を見たりですね、それから、明の皇帝のところに宣教師が雇われたりですね、そういうことはあります。

しかし、東洋の仏教を本格的にヨーロッパが知るのは、イギリス人がインドを支配しようとして、インドの全てを調べるわけですね。そのときにサンスクリット語とかパーリ語という古代や中世の言葉を研究するわけです。膨大な文献残ってますから。それで、もって、壮大な仏教哲学があったことに気がつくわけですけども、それを原始仏典や大乘仏典って呼びます。それが最初にヨーロッパ語訳されたんですけど、それをおそらく、皆さんもご存じだと思いますが、ニーチェという、ものすごい天才が目を通して仏教を知って、ヨーロッパのキリスト教的な考え方と、仏教的な考え方をスパークさせて、いろいろ考えた。それ以降はいろいろな流れがあります。ショーペンハウアーも読んでるし、ユングも読んでる、考えればいくらでも考えられるんですけども、調べてみてもそうだろうと思います。

まあ、簡単に言いますと、東洋というのは一元的な世界観、宇宙観を持っています。で、西洋というのは二元的な宇宙観を持っています。神と人とか、善と悪とか、そういう相いれない二元的なものをもって展開していくと。それが今、どちらの側も、壮大なスケールと、それから細かいところまで分かってきたというところで、これからどういうようにそれが回りめぐって、新しいものを生み出していくかという、面白い時代に入ってきたと思います。

ちょうど1970年代ぐらい、正確には67年ですか、弟子丸泰仙という日本の禅僧が、まあ飛行機で行けないこともなかったけど、お金がなかったんで、シベリア鉄道を乗り継いだり何かしまして、フランスにたどり着いて、本人はアメリカまで行くつもりだったらしいんですけども。途中のフランスで、坐禅を広めて、現在はたくさんの方々の道場っていいですか、お寺がすでに存在していますし、何百人という、実際に、フランス人とかドイツ人とかイタリア人の禅のお坊さん、ちゃんと出家得度した方々が活動していて、結構坐禅も盛んにされています。

日本にある大乘仏教自体が、大変難しい、高度な哲学なんですね。一生かかってもまず読み切れないぐらいの基本的な文献があります。大正時代に作られた『大正大蔵経』というのを本棚に並べてみますと、まず読む気がしないですね。膨大ですから。それぐらいの積み重ねがあるんです。

弟子丸泰仙という人は、あんまりそういうこと言わない人で、ただ坐れと。道元禅師

も、只管打座、ただ坐れって言うんですけども、この、「ただ坐れ」と言っって、仏教の身体そのものを伝えたんですね。で、坐ってみようっていって坐る。そういう形で西洋に、日本の禅を伝えていく。弟子丸さんを高く評価することになるかもしれないけども、それまでは、やっぱり難しい仏教哲学とか、そういうことだけだったんです。しかし、実際どうするのかっていうこと、仏教というのは実践ですから、どうするのかっていうことはなかなか伝わらないんですね。やっぱり書物のほうが尊いと思っちゃうから。だけど弟子丸さんは、ただ坐ってみせた。ただ坐ってみせたことによって、非常に大きな影響力を持った。

68年、5月革命が起きます。で、弟子丸さんは67年に向こうに行かれていますんで、青年たちが、マルクス主義や社会主義や進歩思想とかそういうものに対して大きな疑問を持ったときに、タイミングよく行って、しかも難しい理論を言わないで、「ただ坐れ」。只管打座をせよということで、つまり、身体として仏教を持って行って、「おまえたちもやってみろ」っていう形で伝えたのが非常に良かったんだと思うんですね。

その他にもいろいろな形で仏教は今も伝わっている、もちろん難解な仏教哲学も伝わっていく。両方がお互いに好奇心を持ってやっていますから、両方が非常に相互理解を深めようっていう動きがあって、まだそれはマスメディアの上には載ってこないけども、これはかなり大きな流れだと思います。ヨーロッパもアメリカも日本も、「不安の時代」です。「今までの既成のシステムが崩壊していく」、そういうような時代です。楽しい時代、楽な時代は深刻に考えないですね、人間というのは。

だけど、ものを考えるっていうのは、やっぱり、地獄の底に落ちないとだめですね。あるいは、絶望の果てに考えないと、人間は真剣に考えません。ずーっと考えようとしても、それはなかなか難しいですね。よほど特殊な人でないと。

今までは、なんとかなるんじゃないかくらいの中で考えてきたんですけども、今はもう、これからどうやって生きていったらいいのかっていう、そういう時点になってきて、お互いが、つまり東と西が考える。19世紀とか20世紀に出合ってるんですけど、われわれ東と西は。しかし、そのときはレベルもスタイルも違う形で、現代、大きなうねりが出てきていると思います。弟子丸泰仙さんがやったことは、そういうことの嚆矢、始まりの一つだったように思います。

もうそろそろ時間来てますんで。映画の、5人のうちの、最初に出てらっしゃる森本先生が、この大学にもゆかりのあるかたですが、その森本先生も弟子丸泰仙さんと、どういうふうにして巡り合ったかというようなことも映画の中にちらちらと出てきます。そういう、弟子丸さんに実際に会ったり、あるいは、会わなくても、その思想の影響を

受けたりっていう、あとフランス人が2人と、日本人が2人出てきて話します。それをゆっくりと、いっぺんに分かっていっても大変ですから、ゆっくり、ざっと見ていただきたいと思います。もしお時間があれば、質問にお答えすることにします。

なかなかまとまらない話をおつきあいいただいて、ありがとうございました。

林 どうもありがとうございました。最初のほうのお話と後半のお話は、一見無関係のようですが、映画を見ていただくと、その間の関係が分かると思います。最初のほうのお話で、映像言語とか、映像文体というような言葉が出ましたが、われわれは一般的に、映画監督の作品を見るときに、作風だとかスタイルだとかという形で、「あ、この人はこういう映画を撮るんだな」とか「この映画はこの人の作品だな」というふうに分かる場所があると思うんです。あれはやはり、その人なりの書き方とか、それから表現のし方というのがあるんですね。それを「言語」というような言葉で考えようとしているのが、最近の映像に対する問題意識なんです。だから、作品を見るときに、こういうような映像とか、こういうような描き方っていうのは、一体どういうような文法っていうか、方式にのっとって行っているのかなというようなことを考えるのが、一種の映像言語についての分析で、最近そういうことが行われているんですね。

それから、後半の弟子丸泰仙さんの話は、わたしもフランスに若干関係があるので、フランスに行きますと、数多くの方が弟子丸さんのことを知っているんですね。弟子丸さんっていう人が日本からやって来て、ガレージでもって坐り始めた。ほとんどフランス語をしゃべれませんので、ポーズを見せるのと、あとは英語で説明するぐらいなんです。ガレージでもって、突然坐り始めたんです。そうすると、そこに「何だ、何だ」と集まってきた人たちが取り巻いて、そのうちに、そのうちの何人かが一緒に真似して坐ってみるような形で、そんなことをしているうちに何人かの弟子ができて、先ほどお話があったように、当時、学生運動がフランスでも盛んだったもので、その学生運動のトラウマを持った人たちが、西洋の思想っていうのに対して何かこう疑問を感じたんでしょね。で、そこに妙な人がやって来てガレージで坐っているっていうんで、そこに集まってきて、何かを求めてたんでしょね。それで、知らず知らずのうちに、そういう人たちが集まって、弟子丸さんを囲む一つのグループができました。

その人たちは、結局、ロワール川という川がフランスに流れていて、ロワール川のほとりに古いお城があるんですが、そのお城を買って、そこを道場にして、禅道尼苑っていうんですけれども、そこに修行の道場を作ったんですね。古城の跡に。そこからヨーロッパ中に、各地にさまざまな弟子が自分の道場を開くという形で、現在ヨーロッパでは

かなり禅というものが普及しているんです。これから登場する映画の中にも、フランス人の僧が2人出てきます。また『正法眼蔵』を翻訳として、フランス語で読みたいという人たちも随分増えてきたので、フランス語の翻訳者のかたも、これは日本人ですが、登場します。

そんなことで、これから映画を見ていただきますが、10分程度休憩をしてから始めたいと思いますので、ちょっとここで休憩をさせていただきます。トイレはこの向こう側の端にありますので、出て、少し先に行きますと、表示があります。